

呑川レポート2010-4号 アシ(葦)原～改修工事の植生

「呑川耐震補強工事」は、昨年2カ所が終わりました。
工事の主眼は「自然環境」ではありませんでしたが、
実際にはどこまで環境に配慮されたかが気になるところです。

ここは(その6工事)「本村橋～道々橋」(行ったことが無い方は、
右岸：仲池上1丁目 左岸：久が原1丁目)を見てみましょう。



「道々橋」から上流を見たところですが、矢板鋼板の上にコンクリート化粧板が被され、
きれいに仕上がってはいますが、特に環境に配慮されたようには見えません。

しかし河床には2カ所の「湧水孔」が設置され、それは水深があるため見えにくく、
しかもいい天気の日には青空が反射し、ますます見えないのです。

しかし注意してみると・・・



右岸には、か細いながらも植生を施した様子が見られるのです。
これはアシ、もしくはツルヨシ、それともマコモでしょうか・・・

まだほとんどの人が気がついていないようです。



とても、か細いので心配ですが、コンクリートの植生ボックスに入れられているので、多少の大雨でも大丈夫なのでしょう。

ところが、今度は「左岸」側を見ると、全く植生が見えません。



当初の設計では両岸に植生が並ぶ予定です。
ところが、どうみても水面に伸びる植物は見あたらないのです。

水面下にあるかとも思いましたが、護岸が水面に映るなど光の反射もあるせいか、
どうにも見られませんでした。

そこで、日を改め、日差しが河床に届く時間帯を見計らってのぞいてみました。



するとなにやら、河床の泥に混じって緑色のものがわずかに見えます。
これは、なにか葉が落ちているのでしょうか・・・
それとも、なにかの茎が見えているのでしょうか・・・

目を皿のようにして探ると・・・



これは明らかに植生ロールのようなものに、植物が埋まっているのが見えます。ただ植物の背が低いため、水面上には顔を出していないのです。植生の工事は、左岸にも行われていたのです。



植物は、これもアシなのか、ツルヨシなのか、マコモなのか特定は出来ませんでした。



これは明らかに、「オオカナダモ」です。
この場所には「オオカナダモ」が自生していましたから、これを工事中に一時避難させ、再びここに移植したものと思われます。

今年度開始の工事は、さらに2カ所が始まりつつありますが、さらに来年度の工事には、「道々橋」直下の工事も予定されています。
そうすると、水面は下がりますので、いま見えていない左岸の植生も水面上に顔を出し、見えるようになると思います。

どんな風に植生が広がるか、今から楽しみです。

さて、最近「呑川の会」の新会員も増えましたので、表面的な現場のレポートだけにとどまらず、
一歩深めて、3面コンクリートのこの呑川に、植生を施す意味について考えてみたいと思います。
とりわけ川の代表的な植物「アシ(葦)」についてです。

*「アシ」は「悪し」に通じるので、「ヨシ」(良し)と呼ぶ人が多いようです。
でも「葦」は「アシ」としか読めません。

古事記物語

福永武彦作



日本で最初に書かれたという物語に「古事記」があります。

(これは神話物語ですが、天皇を権威づけるために、「古事記」の話を持ってくるのは無理だと思いますので、それに同調するわけではありません。ただ「古事記」に描かれた日本の原風景や、当時の人々の思考を知るにはとても面白いのです。)

この本の表紙に描かれた場面は、「オオクニヌシノ神」が策略にかかり、「アシ原」の真ん中で「スサノオノ命（ミコト）」によって、「アシ」に火を付けられ窮地におちいる場面です。

このように「古事記」には、「アシ」や「アシ原」が多く出てきます。

神々の住む「高天原（たかまがはら）」では、「下界」で多くの強者が争い、なんとか平定したいと策を練ります。

その「下界」を「豊葦原の国」（とよあしはらのくに）と呼びました。

つまり当時の日本は、「アシ原」が豊かに広がっていたので、そう呼んだのでしょう。

それはこんな風景でした。



ここは「多摩川」です。
こんな風に、あたり一面「アシ原」が広がっていたのが、日本の「原風景」でした。
(もちろん、遠くにビルや鉄塔などが建ち並ぶはずはありませんが・・・)



秋から冬になれば「アシ原」は茶色に染まります。
こうなったとき、人々はアシを刈り取り、家の屋根にふいて「わらぶき屋根」にしました。
アシでヨシズを作って夏の暑いときの日よけにもしました。
呑川では、海苔の業者が河口に立てた「ノリヒビ」にも利用したことでしょう。
さらには海苔を天日で乾かすヨシズも作ったことでしょう。
そのほかたくさんの生活用品に無くてはならない材料として、つい最近まで活用されてきました。

「呑川」にアシなどイネ科を植生することの第1の意味は、日本の原風景を再生することに

あると思っています。

川にアシが生えているのは、当然の自然の営みであり、風景なのです。

さて「古事記」に戻りますが、応神天皇がこの世を去ったとき、3人の世継ぎたちに争いが

起こりました。

お兄さんは策略に掛かって、川に浮かべた船を転覆させられてしまいます。



なんとか助かろうとするのですが、「川岸に隠れていた兵卒」に追い打ちをかけられてしまうのです。

この物語を読むと、兵隊が大きな建て屋に隠れたり、森に隠れるのは判りますが、だだっ広い川原に大勢の兵卒が身を潜めていたというのは不自然な気がします。

そこで多摩川の「アシ原」を歩いてみることにしましょう。



この通り、アシは背が高く伸び、人の身長を遙か超え、すっかり隠れてしまいます。

アシ原を歩くと、まわりは全く見えず、迷子になる不安さえ覚えます。

実際、ホームレスの方がぬ一っと出てきたときはビックリしました。

子どもが歩くのはとても危険です。

しかし、これなら「古事記」で河原に兵卒が隠れていたというのは納得できます。
「アシ原」は、とても大きな役割を果たしていたのです。

(実は私は、文学や歴史をひもとくとき、いろいろ興味が湧いてきて、実際に調べたり、
現地に行くのが大好きなんです。

それは天文学でも、気象でも、土木や、物理、機械、電気でも同じですが・・・)

もちろん、呑川にアシなどを植生する意義は、日本の原風景を再生する事だけに
あるわけではありませんが、他の点については又の機会があれば・・・

-----from-----

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
